韓国における「日帝」植民地の跡を訪ねる

小林正弘

私は今夏、市内八名の社会科教師の仲間とともに三泊四日の旅をした。プランをたてるにあたって、在日韓国人の某氏にお世話になった。氏が強く勧めてくれたのは、日本人観光客があまり訪れないという独立記念館、安重根記念館、閔妃暗殺現場、統一展望台等である。最初に訪れた竜頭山公園で私たちを出迎えたのは秀吉の朝鮮侵略（韓国では壬辰倭乱という）時の英雄・李舜臣将軍の銅像である。南の海上、日本を睨んで立っている。四日間を通して、日帝支配下のツメ跡もさることながら、秀吉の侵略の凄まじさも見せつけられることになった。

二日目は新羅王朝時代の首都慶州に向った。国立慶州博物館で実によく整理された陳列品の数々をみながら、まるで日本の奈良に戻ったかと錯覚させられた。当然のことながら、遺物の年代は一世紀から数世紀は古い。〝日本文化の源流ここにあり〟を実感させてくれた。慶州を代表する仏国寺は五二八年の創建とされているが、千余年後秀吉の軍隊によって礎石を残して焼き払われた。今は見事に再建されているが、石段には当時の猛火の跡が残されていた。

三日目、いよいよ独立記念館である。特急セマウル号の車窓に田園風景が広がる。大田を通過、ああ、佐渡鉱山を初め県内に強制連行された少なくとも五七〇〇名を越える人々はこの辺の村々から狩り出されたのではないのか。天安で下車、バスで記念館に向う。記念館は一二一万坪という広大な敷地の中

にあった。独立記念館建設のきっかけは一九八二年の教科書問題だという。怒った国民が記念館建設を呼びかけ、当時の日本円で一二〇億円のうち約半分を募金で集め、残りを政府が補助して建設されたという。誰かが、「なぜここ天安なのですか」と質問すると、ガイドの金さんは、良く聞いてくれたと言わんばかりに、一九一九年の三・一独立運動で「朝鮮のジャンヌ・ダルク」と言われている柳寛順少女の話をしてくれた。「土地の問題もあるでしょうが、彼女の出身地がここ忠清南道天安なのです。彼女は当時梨花学堂（現梨花女子大）の高等部の生徒で十六才でした。三・一運動に対する日本官憲の弾圧を逃れて故郷に帰ってきた彼女は何十という村々を駆けめぐり、『私たちは脱落していいものでしょうか』と再起を呼びかけ、四月一日、のろしとともに集会・デモを組織したのでした。一緒にデモに加わった父母、兄とともに先頭に立ち、万歳を叫んだのです。父と母は銃で殺され、寛順と兄は逮捕されました。彼女は獄中でも万歳を叫び『私は何も悪いことはしていない』と言い張りました。拷問と衰弱のため、一九二〇年十月、ソウルの西大門刑務所で死んだ韓国の英雄なのです」。金さんの説明にも段々と熱がこもっていくのがわかる。食堂で昼食をとったが、やはり日本語で話す私たちをみつめる老人の視線に冷たいものを感ぜざるを得なかった。

記念館は「独立運動」をテーマに古代から現代までの文書・写真・現物が分館毎に系統的に陳列されている。時間が一時間半と限られていたので、私たちは近代以後を中心に見てまわった。近現代はまさに韓国人のいう日帝の七奪（王母を奪い、民族を奪い、土地を奪い、食糧を奪い、名を奪い、自由を奪い、人を奪った）とそれに抵抗する民衆の闘いの歴史だった。私などは抗日の英雄といえば金奉準、安重根、柳寛順程度の知識しかないが、韓国国花のムクゲのように踏まれても立ち上がる不屈の義士たちが実に多くいたという事実を知った。

私にとっては米のカイライ・反共・独裁の李承晩が、「抗日」の一点で高く評価されてもいるのである。館内では多くの家族連れを見たが、まさに息をのむような日本官憲による拷問を再現したろう人形の前で、父親が小学生の息子に淡々と説明してまわっている。見終えて外に出る頃には非常な疲れを感じた。毎年八月十五日の光復節にはここで、大統領が国民に向って歴史をふりかえる演説を行っているわけである。私たちは再びバスに乗り、一路38度線の統一展望台に向った。展望台は漢江（ハンガン）と臨津江（リムジンガン）の交差する小高い丘の上にあったが、そこに向う道は「統一への道」と名づけられていた。勿論、非常時には滑走路になるであろう道である。展望台からは河岸に張りめぐらされた鉄条網が延々と続く風景とともに最短距離四六一メートルという対岸に

は韓国が「宣伝村」と呼ぶ集落が見えた。人が住んでいない証拠に夜一斉に灯火が消えるのだという。又、対岸からはひっきりなしに拡声機による放送が流れてくる。金さんに「何を言っているのか」と聞くと、「私にもよく聞きとれないが、演説は〝金泳三の徒党ども……〟」のようです。とはき捨てるように言う。

見わたすところ、双方とも陣地らしい施設も見えず、韓国側では板門店に通ずる道路工事が行われていた。その平穏さが私には逆に緊張感を感じさせた。まさに世界が注目している、一触即発の地なのである。この緊張をつくり出した遠因も又日帝侵略の結果であることを思えば、無関心ではいられない。

四日目、朝一番に安重根記念館に向う。記念館の研究員という李さんは六十代と思われる方だったが、時間がないという私たちを引き止めて、これだけは聞いて欲しいと館内を連れまわった。「伊藤は暗殺ではありません。韓国独立を願って射殺・処刑したのです。ピストルはすぐロシア官憲に渡しました。獄中で「東洋平和論」を書き上げたいから処刑を待ってくれと願ったのに許されませんでした。彼の言いたかったことは韓日友好のために人民は手を結ばなければいけないということです」。次は国立博物館（旧総督府庁舎）である。本で読んで知っていたつもりでも、現場に立って、「これは一体何だ！」と思った。景福宮の正殿である勤政殿と正門である光化門の間に、まさにすっぽりと景福宮を隠すように総督府庁舎は建てられたのである。しかも、上から見ると「日」の形になっているとのこと。この建物も、ついに来年、現大統領によって解体移築されることが決まっているという。

閔妃暗殺の現場も見た。当時、日本の公権力の頂点にいた三浦梧楼公使による王妃の暗殺という、安重根が「伊藤博文罪悪十五ケ条」の筆頭にあげた歴史の事実である。四日間の旅で見た秀吉の侵略、日帝三十六年の支配が残したツメ跡はどれ一つをとっても許し難く、まして、永野・桜井発言につながる歴代日本政府の要人による「韓国の発展に寄与した」とする妄言など、全くの論外である。四日間の全行程を共にしてくれたガイドの金分順さん（五十代後半と思われたが）の豊富な知識と在日十年という正確な日本語の通訳に助けられて、有意義な旅をすることができた。その金さんが空港に向うバスの中で、あらたまって、「日本の教師であるというみなさんにお願いがあります。四日間で見たものをありのまま、日本の子どもたちに伝えてください。そして二度と同じ過ちをくりかえさないようにしてください……」最後をしめくくるすばらしいあいさつに感動しつつ、ソウル・金浦空港にサヨナラを告げた。

（こばやし　まさひろ＝
新潟市・五十嵐中学校）